

地球科学系の学会・野外調査への子連れ参加の可能性 Possibility of participation in academic meetings and field surveys with kids

早川 裕弐^{1*}

Yuichi S. Hayakawa^{1*}

¹ 東京大学空間情報科学研究センター

¹Center for Spatial Information Science, The University of Tokyo

学会や野外調査に参加する際、様々な理由により、子連れで参加できるならばそうしたい、といった要望は潜在的に多いのではないかと思われる。本講演では、その可能性について実際の経験に基づき議論したい。

地球科学系の学会において、ベビーカーを押した家族連れの参加者を見ることは欧米では珍しくない。しかし、日本においてそのような光景を見ることは、未だほとんどないと思われる。たとえば EGU や AGU ではチャイルドケアサービスが会場内に用意されていたりするが、JpGU など日本の学会においては、会場近くの民間の保育所を紹介するケースが増加しているものの、会場内に保育施設を準備するといった試みは未だなされていないようである。このように欧米においては子連れで参加しやすい環境が整っていることも理由のひとつとして挙げられるが、一方で費用対効果の問題や、社会的背景の相違が関係している可能性がある。日本においては、会場にベビーカーを押して来るといった光景が稀であり、そうしたかたちでの参加がしにくい雰囲気、あるいはそれ自体を考えつかなかったという場合もあるのかもしれない。しかしながら、日本のある学会において実際に幼児を連れて参加をしてみると、他の参加者にも好意的に受け入れてもらえ、いくらか制限はあるものの、たとえばポスター形式であればそのままでの発表も不可能ではないことが判明した。しかし、学会といってもさまざまな雰囲気、参加形態がある。今後、このような試みが多くの学会で実施され、子連れでの参加を日本の学会においても「あたりまえの光景」に昇華していくことが、育児形態の多様化を進めるうえでも望ましいものと考えられる。

フィールド調査に関しては、アクセスが容易な範囲であり、調査内容が過密でなければ、半ば調査、半ば観光といったバランス感覚も必要となるものの、非研究者である家族の参加も可能なケースは多いと考えられる。欧米ほどではないにせよ、近年は子ども連れのためのアウトドア用品も充実しつつあり、これらの用具を駆使することで、子連れでの野外調査が容易になり、また家族構成員に対するアウトリーチ・教育効果も期待できるであろう。